

関良助は目の前の緩やかな斜面を上り、

向山家の一つの墓碑前に立ったあと、下げてきた手桶を老爺に渡した。湊川に水を汲みに行かせるのだろう、と思われた。それから、懐から手拭いを出して、墓石を丹念に拭きだした。それが終わると、隣の小さな墓石の前に腰を落として手を合わせたあと、そっと手拭いを動かし始めた。時折、手を止め、目頭を押さえるようにしている。それが弥一郎には不可思議だった。墓は、数年前に胎児のままに流れた向山

夫婦の水子墓のはずである。

弥一郎は胸の内で年数を指折り数えてみた。遠藤から得た情報からすると、関が向山周慶に助けられた時期と符合する。

〈まさか……いや、やはりそうか〉

そうに違いない、と思った。そうであれば、あの夜錯覚だとして片付けた、男女の欲情を超越したような慈しみのこもった関の眼差しが説明がつく。今度こそ確かなように思われた。

弥一郎は木陰から腰を上げて、数間歩いてから斜面を上り始めた。そのとき、それまで見えていた関の姿が見えなくなった。ひよつとして気配を察知して逃げたのではないか。一抹の不安に襲われて、一気に駆け上がってみると、立ち並ぶ墓石と樹木の生い茂る小山を背景に、関がうずくまり、突然の侵入者にも気をそがれることなく雑草を抜いている。

弥一郎は息を整え、何食わぬ顔で傍らを通り過ぎ、隣の墓の前に立って手を合わせた。

やがて、いましがたの老爺が桶に水を満たし、身体を大きく横に倒すようにして帰ってきた。手伝って草を抜き始めたが、関が何か囁くと、白髪頭を大きくうなずかせて、村の方へと戻っていった。

相変わらず関は、黙々と草を抜いている。根の部分の部分を土の中に残さない丁寧な作業である。

抜いた根についた土を払い、地面に開いた穴を埋めてゆく。いかにも自然な動作だ。それを見ているうちに、弥一郎はいっつか、故郷丹波の

祖先の墓地で、自分も同じようにして雑草を抜いていたのを思い出した。

彼は目をそらして天を仰いだ。青い空に、ち

ぎった薄紙を張りつけたような雲が流れてい

る。弥一郎はそのゆっくりとした動きを目で追っ

た。自分と同類かもしれない男を斬ろうとして

いることに、気持ちのひるみを感じていたのだっ

た。

「いまさらあとには退けぬ」

気のない美しさに魅了された。

そのとき、関が目を上げてこちらを見た。

「この墓には、私のせいで、この世に生まれ

出ることのなかった佐和どのの赤子が眠っている

のです。この白糖はその子へのせめてもの手向

けなのですよ、刺客どの」

讃岐に数年間住んだだけあって、薩摩訛りの

消えた物言いである。

気づかれていたのか、と弥一郎は不覚を取った思

視線を雲から落とし、左腰の刀の重みを確かめたあと、初めて隣の男を鋭く見た。関はいつのまにか雑草を抜き終え、小さな水子墓の前に跪き、深く頭を垂れていた。

「関良助もやはり人の親なのだ」

そう思ったとき、関が胸の内から懐紙に包んだ物を出して、広げて供えた。何かが日射しを浴

びてきらめいている。弥一郎は思わず覗き込ん

だ。そこには、いままで目にしたこともないよう

な白い砂糖が盛られてあった。彼はその混じり

いである。関が立ち上がり、目を細めて弥一郎

を見た。

「あれだけ強い殺気を感じたのは、初めてで

す。……このたびばかりは駄目なようですね。も

う製糖も成りましたし、思い残すことはありません

せん」

弥一郎の存在には何日も前から気づいてい

た。手向かうが、とうていあなたの剣には打ち勝

てないだろう、と言うのである。

「思う存分に闘える向こうのもっと広いところへ行きましょう」

言葉のあとに、もう一度水子墓に手を合わせ

た。弥一郎はその潔さに圧倒された。気持ち

の上で負けている。これでは、技量が上でも勝

つことはおぼつかない。下手をすれば、斬られて

しまうこともありうる。この際、自分の立場を

優位なものにしておかなければならない。皮肉が

口を突いて出た。

「さすがに、不義密通の証の前ではやりにく

いのかな」

関の目に一瞬戸惑いの色が浮かんだが、

弥一郎の考えていることに思い至ったのだら

う。すぐに怒りの色に変わった。

「おはん、なんち言うるか」

気持ちの昂ぶりに、薩摩言葉になっている。だ

がすぐに、平常心を無くしたことを恥じたの

か、眉根を寄せ、二つ、三つ腹で深い呼吸をし

たあと、おもむろに口を開いた。もとの落ち着

いた声色に戻っているのが敵ながら見事だった。

十

「いまからおよそ十年前、私は湊川の

下流で行き倒れていたのを、向山周慶どのに助

けていただいた」

弥一郎の聞いているのを見定めてから、あの

です」

無理をしたためか、いつしか胸を患っていたの

です」

まの無謀な巡礼の旅だった。加えて粗食のうえ

らない私には、寒さに備える術も衣服もないま

「とくべつ寒かった。薩摩の暖かい冬しか知

るは、と思いついたように湊川の方を眺めた。

凍死するのは珍しいことではない。そのとき死

を覚悟したと言う。

そうして、ついに力尽きて倒れた。旅人が

弥一郎は、自分がどうして目の前の男の話にじっと耳を傾けているのか、分からなくなつた。日射しが墓石の影を長く引き始めている。彼は焦りを感じた。もうすぐ向山周慶たちがやってくる。そうすれば、少々面倒なことになるだろう。

「手短かに申せ」

高飛車に言った。関はそれには構わず、言葉をつづけた。自分が命を助けられたのは周慶どのの医術のおかげである。それは紛れもない

「しかし、私の看病のために無理がたり、胎児は死んだ……。そうなることは十分に承知していたはずですよ。その直前まで、あの人は私の枕元にいたのですから」

そして悲しみのあとも、わが身の不幸を顧みず、懸命に介護してくれたのだそうだ。

白糖作りは向山夫婦の念願であつた。まるで我が子を産み育てるような情熱を持って臨んでいた。本復後、二人のもとで働くうちに、佐和どののために役立ちたいと思うようになった。

事実だが、妻の佐和どのの献身的な看病によるところが大きいのだと言う。

「ここで、それがどれほど心のこもつたものであつたか、いかにあなたに話したとて、お分かりいただけないでしょう。ですが」

関は言葉を切つて、弥一郎を直視した。

「佐和どの、そのとき身ごもつておられた」

それは弥一郎にとって意外な事実だつた。二人の間にはしばらく沈黙が流れた。

二年の後、甘蔗の栽培方法や製糖技術を学ぶためにいったんは薩摩に帰つたが、目的を果たしたのち脱藩して、再び湊村に來たのだ、と話した。

「藩や家や自己の栄達のためではない。一人のおなごの優しさに報いるがために生きる。あの人を通じて、私はこの世に生きた自分の影を残してゆきたいのです」

そこで大きく息を吸つたあと、佐和どのとは、決してあなたが考えているような間柄で

はない、と語気を強めた。

弥一郎の胸に、ある種の感動が生まれてい

た。だが、それを素直に認めるのは敗北を意味した。

「なるほど、言われることはよく分かったが、そのためなら、他藩の物を盗んでもよいというのはどうであろうかの」

「他藩の物……」

関が首を傾げたあと口もとを緩めて、甘蔗の

だ、と伝えられています。もつとも本当のところは分かりませんが……」

それを私することこそ罪である。自分は

間違ったことはしていない。高松藩の処遇な

ど、どうでもよい。砂糖製造によって民の暮ら

しが潤いさえすれば……、いやそれですら、

自分にとってはどうでもよいことなのだ、と話

す。本当のところは、佐和どのの喜ぶ顔が見た

いだけなのだ、と言ってはばからない。

弥一郎には、目の前の関良助が、心根の真

ことですね、と問うた。弥一郎の詰問するよう
な凝視にもかかわらず、笑い出しそうになっ
ている。

「甘蔗は薩摩藩の物ではありません」

弥一郎は、予想外の返答にあっけにとられ
た。

「奄美大島の物でした。いや、それも違うか

な。その前は明国の物だったのだから。大島の
直川智なる人物が製造技術とともに持ち込ん

つ直ぐな、とてつもなく大きな存在に思えてき
た。

「この男は自分には斬れぬ。つまるところ、

自分は金に釣られて、この男を抹殺しようとし
ているだけなのだ」

羞恥のあまり、相手を凝視し続けることが

出来なくなった。関がそばの空き地に歩みを進
めている。やがて、振り向いて刀の鞘を払っ
た。

「言い訳がましく、思わぬ長話をしてしま

ました。ですが、これでお疑うたがいが晴はれたでし
う。さ、敵かなわぬまでもお手向てむかい致いたそう」

息いきを吐はきながら、弥やい一郎ちろうは肩かたを落おとした。
関せき良り助ようが怪訝けげんな顔かおをした。

弥やい一郎ちろうは、落おちようとする日射ひざしを受けて銀ぎん

(以上3月18日放送分)

色いろに輝かがやいている関せきの刃はを呆然ほうぜんと見た。張はり詰つめ

ていた氣力きりよくが萎なえ、鬪争心とうそうしんが失うせてしまつてい

る。墓はかの周しゅう辺へんが、冬ふゆの傾かたむいた夕日ゆうひに突とつ然ぜん輝かがや

きを増ました。弥やい一郎ちろうがその方ほうを見みやると、雑草ざっそう

を抜ぬいたあときれいにならされた乾かわき切きらない

土つちの色いろが、黒くろ々と点てん在ざいしていた。

「止やめた」